

## 小善成仏と三因仏性

勝野隆広

### 一、問題の所在

小善成仏とは、『妙法蓮華經』方便品第二の、いわゆる五仏章の第二過去仏章の偈文に出る、小さな善行により仏道を成就する、という教説を指す。そこには、六波羅蜜の修行とならんで、「童子の戯れに沙を聚めて仏塔を成せる」、「散乱の心にて、乃至一華を以つて画像に供養せし」などのささやかな善行もすべて「皆な己に仏道を成じき」とされる。この「童子の戯れ」や「散乱心」の行為という小善でさえ仏道成就したという説は、『大智度論』に引用されていて、法華經の特徴的教説としてみなされている。

一般的に仏道成就には、厳しく長期間の修行が求められる。あるいは易行が提唱される場合には、仏に対する強い信仰や帰依、または自己内省などが求められる。しかし法華經の小善成仏説には、そうした小善成仏を可能とならしめる理由が明示されているとはいいいがたい。したがって、法華經を解釈

した諸師は、それぞれに小善成仏説に対して独自の解説や理論付けを行っている。<sup>(2)</sup>

例えば、世親の『法華經論』では

「乃至、童子の戯れに沙を聚め仏塔と為す。是くの如き諸人等、皆な己に仏道を成ず」とは、謂く、菩提心を発し、菩薩行を行ずるは、所作善根の能く菩提を証す。諸もろの凡夫及び決定声聞の、本来未だ菩提心を発さざる者の能く得る所に非ず。是くの如く、乃至小低頭等皆な亦た是くの如し。(大正二六、七下、八上)

と、童子の戯れの行為を發菩提心に関係つけて解釈している。

こうしたなか、天台は『法華文句』において、譬喩品の「断世間仏種」の語を解釈して

「断世間仏種」とは、淨名は煩惱を以つて如来種と為す。此れ境界性を取るなり。大品は一切種智を以つて般若を学す。此れ了因性を取りて仏種と為す。涅槃は心性の理を断ぜざるを用う。此れ正因性を取りて仏種と為す。今經は小善成仏を明かす。此れ縁因を取りて仏種と為す。若し小善成仏を信ぜずば、即ち世間の仏種を断ずるなり。(『法華文句』卷六上、大正三四、七九上)

と、代表的な大乘經典の仏種に対して、小善成仏こそ法華經の仏種である、それを信じなければ仏種を斷ずることになると強く主張している。天台の小善成仏重視の理由と小善成仏の根拠について、本小論では見ていくことにする。

## 二、天台における小善成仏理解

天台は、過去仏章は「五乗に約して広く顯一を頌す」<sup>(3)</sup>ものであると解釈している。すなわち、菩薩、声聞、緣覺、天人の五乗の開顯を示した部分であるとみるのである。二乗だけでなく人乘天乗を含めた開顯が明かされている点が過去仏章の特徴とするのである。特に小善成仏の記述は、人乗と天乗の行為を指すものとし、さらに人乗と天乗の善行の差異について、

因の時、至心に財を傾け宝を捨てれば、果の時、任運自然に業を受く。故に是れ天乘なり。因の時、汎汎悠然として善を作せば、果の時、作意勤求して、業を得る、故に是れ人業なり。(同卷四下、大正三四、五七上)

至心に一句を聞くは是れ天業。散心に一句を聞くは是れ人業。(前同、五七下)

と、天乗は至心からの善、人乗は善行に専念しない散心の特徴とすると、天乗と人乗の違いを指摘している。すなわち、小善成仏で問題となる「戯れ」や「散心」の行為は、人乗の

善行の特徴であると捉えているのである。この場合、人乗とは凡夫を意味するものであることは、次の文からも窺える。

天台は、小善成仏説に関する地論派の大師の解釈を示して地師解して云く、童子は是れ童真地にして、二乗凡夫の二辺の欲心無し。沙を聚めて塔と為す。沙は是れ無著、塔は是れ衆行なり。積集して正覺の心を含蔵す。彼謂く、義は無生に會す、以って深詣と為す。今謂く、文に乖き堅狭なり。何となれば、登地は自ずから成仏すべし。修羅の海を度るが如し。何ぞ奇と為すに足らん。今、童稚の戯沙と乱心の歌詠、微を指すに即ち著なるを以って、凡夫の海を度るが如く不可思議なり。仏は分明に広く五乗を會して毫善も漏らさず。而るに収羅の広意を棄て、徑に無生を取る。若し向の積の如くならば殆ど二乗を撰せず。況や凡夫をや。深を論ずれば但だ是れ一致なるのみ。広を定むれば則ち經文に乖く。

(前同、五七上)

地論師は、童子の戯れに砂を集めて塔を作る行為は、十住の第八地である童真地を指すものであるなど、小善成仏の記述は単なる比喩的表現であると理解し、二乗や凡夫には関係ないものとする。これに対して天台は、童真地であるならば、成仏は決定していて不思議なことではない。法華經で、童子の戯れの行為や、散乱心での供養を成仏の因として挙げているのは、わずかな善行でも成道という著しい結果をもたらすことを示すことによつて、開會のもつ計り知れない意味を明かすものという。小善成仏は二乗だけではなく人天乗、つまり

凡夫までも開顕されたことを明かすものであり、それは法華の開会の強力な証拠であると位置づけるのである。ここに天台が小善成仏説を重視する理由があるのである。

### 三、三因仏性説による解釈

そして、天台は小善成仏を三因仏性によつて解釈する。

問う、人天の小善は応に果報に住すべし、云何ぞ「皆な已に仏道を成ず」と言うや。答う、此れ応に三仏性の義を明かすべし。大經に言く、復た仏性有り。善根の人に有れども、闡提の人に無しとは、即ち是れ人天の小善、低頭拳手なり。山を為するは簣より始まり、合抱は毫に初まる。昔は方便未だ開かざれば果報に住すと謂えり。今は方便行を開す。即ち是れ縁因仏性の能く菩提に趣き顕実の義を成ずるなり。此れに就いて二と為す。前の十九行は、天人の小善、縁因の種子を成ずるに約して、以つて顕実を明かす。後の一行は了因の種子に約して、以つて顕実を明かす。（前同、五七上）

小善成仏を理解するためには、三因仏性によるべきといい、人天における小善が、涅槃經にいう仏性のある善根の人にあたり、法華經の開会により方便行が会され、天人の小善も縁因仏性としてはたらしき、善の積み重ねにより菩提へ至る、と解釈するのである。小善を縁因仏性とみなすところに天台の仏性説の特徴がある。

三因仏性は、涅槃經の仏性説を、天台が独自に展開した説であるが、法華玄義では、迹門の十妙の第五「三法妙」中に次のように説かれている。

一に総じて三軌を明かさば、一には真性軌、二には觀照軌、三には資成軌なり。名は三有りと雖も、祇だ是れ一の大乗の法なるのみ。（『法華玄義』卷五下、大正三三、七四一中）

仏性を三因仏性で捉えるとき、それは真性軌、觀照軌、資成軌の三軌の性質も持つことを意味する。十妙の最初の三である境妙・智妙・行妙を受けて、位妙に続いて「三法妙」として扱われている三軌は、いわば仏道修行の規範となるもので、真性軌は境（諦・理）、觀照軌は智、資成軌は行に配当される。またこの三法は三の区別があるといつても、一仏乗の側面に過ぎないとされるのである。

したがって、『法華文句』に「方便品」未來仏章の「諸仏兩足尊 知法常無性 仏種從緣起 是故說一乘」を解釈して次のように述べている。

「知法常無性」とは、実相は常住にして自性無く、乃至、無因性無し。無性も亦た性無し。是を無性と名づく。「仏種從緣起」とは、中道無性、即ち是れ仏種なり。此の理に迷わば、無明を縁と為すに由りて、則ち衆生起る有り。此の理を解さば、教行を縁と為すに由りて、則ち正覺起る有り。仏種を起さんと欲さば、一乗教を須うべし。此れ即ち教一を頌すなり。又、無性とは即ち正因仏性

なり。「仏種從縁起」とは、即ち是れ縁了なり。縁は了を資くるを以て正種起ることを得。一起れば一切起る。此の如き三性を名づけて一乗と為すなり。『法華文句』巻四下、大正三四、五八上「実相の無性という性格を明示したうえて、中道無性を仏種と規定している。そして教行を縁として正覚が起るといふ。すなわち縁因仏性（行二小善）が、了因仏性（智）を資すけ、正因仏性（仏種）が起る。「一起一切起」であるから、一つの縁因仏性が起れば、他の了因仏性・正因仏性も起る。こうした動きをする三因仏性を、法華經の仏性説と捉えることにより、小善成仏に根拠が与えられている。法華經には仏性の語は見られないが、天台は三因仏性という範疇を当てはめることによつて法華經の説く一乗思想の持つ皆成仏の意義を仏性説として解釈しているのである。

#### 四、小結

では、ただ戯れや散心の善行を実践すればよいと天台が考えたのであろうか。この点について、過去仏章に五乗の開顯を明かす理由を述べて

答う、三世の仏に皆な開權有り。但だ未來は未だ起らず。現在は始めて行ず、証に於て義弱し。過去は開權已に久し。受化の人皆な四一を成ぜん。並びに十方に於て權を施し実を顯す。証の義強し。之を虚言に構うるは、これを驗らむるに実を以つてするに

小善成仏と三因仏性（勝野）

如かず。故に過去仏に於て広く五乗を説くなり。（前同、五七下）開顯を虚言と構えてしまうものに對して、過去仏における開權顕実の実例を示すためであるという。法華經の開顯への信を生むために、この過去仏章に五乗、特に凡夫の小善成仏が明かされていると見るのである。

天台が、「若し小善成仏を信ぜずば、即ち世間の仏種を斷ずるなり」と小善成仏説への信を強調しているのは、この方便品を読み小善成仏説を受け止める側に、信を求めているものである。即ち主体的に法華經の開會、一乗の教説を受け止め、三因仏性が動いていることを信じていることである。そのことは、法華經をよりどころとする発心を促すものに他ならないのである。

1 『大智度論』卷七九（大正二五、六一九中）、同卷九三（大正二五、七一一下）なお、大智度論における法華經の引用については、勝呂信静「インドにおける法華經の注釈的解釈」（金倉円照編『法華經の成立と展開』平楽寺書店 三六五頁以下）にまとめられている。

2 天台以前の諸師の解釈に関しては拙稿「小善成仏について」（『天台学报』第四十七号）参照

3 『法華文句』巻四下、大正三四、五六下

（キーワード） 小善成仏、人天乘、三因仏性、発心

（大正大学非常勤講師）

concerning doctrinal debate, and those concerning oral transmission were part of the “textbooks” that Nichii copied during his transmission studies.

### 121. DAIHOU Syudatsu’s Interpretation of “one’s own mind”

Zhe-yi PAN

To obtain the truth of Buddha, Tiantai Zhiyi 天台智顛 teaches that it’s fine to meditate on one’s own mind which is easy to be meditated on. But it tends to understand this teaching too easily from old times. In this essay, the most successful one in Tiantai study of Japan - DAIHOU Syudatsu (1804~1884)’s discussion over this problem is taken up, and the traditional comments and their limits are examined. Syudatsu centered on Zhanran 湛然 and Zhili 知禮, settled the traditional comments of Zhiyi’s teaching in two meanings - “Jinyao 近要” and “Mingmiao 冥妙”. “Jinyao” means “Jinyuan 近遠” and “Nengzao 能造” of one’s own mind. “Mingmiao” means that one’s own mind really does exist but without a form. These two meanings are taken to be complementary to each other, and because both are the dharma of mind, they also contain each other.

### 122. Attaining Buddhahood by Small Virtue and Threefold Buddha-nature

Ryūkō KATSUNO

In the Lotus Sūtra, there is a story of a child who playfully built a Buddhist stupa but attained Buddhahood by chanting Namu Buddha only once with a confused mind. This is called an incident of small virtue attaining Buddhahood. Tiantai considers this story as an important one since it candidly shows the Lotus Sūtra’s concept of the Truth of the One Vehicle. Tiantai thinks of behaviors of playfulness and confusion in mind as characteristics of human goodness, explaining the episode of small virtue attaining Buddhahood by the theory of Threefold Buddha-nature. The small virtue is Buddha-nature as conditional cause in Threefold Buddha-nature. Tiantai explains that Buddha-nature as complete cause also moves and Buddha-nature

as direct cause appears by the movement of the Buddha-nature as conditional cause, attaining Buddhahood. This means that a practitioner is encouraged to arouse the resolve to attain Buddhahood on the basis of the Lotus Sūtra.

### 123. On ‘Dharma of Sentient Beings’ in Tiantai Teachings.

Syūjō KIMURA

The ‘Middle Way’ in Tiantai teachings has been generally interpreted as the simultaneous, balanced, and complete realization of both ‘Emptiness’ and ‘Conventionality’. However, Zhiyi’s explanation on this term in his *Weimojing wenshu* (*Commentary on the Passages of the Vimalakīrti-nirdeśa* 『維摩經文疏』) can be summarized as follows : “Both all things in the worldly realm and the inevitable consequences of sentient beings in six existences originate in ‘Ignorance’, whereas both all things in the transcendent realm and the results of the four holy attainments originate in understanding ‘Ignorance’. Thus, ‘Ignorance’ is the originating factor of everything, and thereby ‘Ignorance’ and ‘Dharma-nature’ are neither two nor separated. When this indivisibility is applied to the observation of sentient beings, it is revealed that the ‘Middle Way’ is concealed by means of ‘Ignorance.’” In conclusion, to contemplate the Middle Way is nothing but to have an insight into ‘Ignorance’ as the ultimate origin of ‘Dharma of Sentient Beings (衆生法 [*Fahua xuanyi* 『法華玄義』 T33.693b)).

### 124. Correlation Between Saichō’s Term “Enki” (One’s Potentiality Ripe for Receiving the Perfect Teaching) and his Understanding of Tendai Teachings

Takatsugu HONMA

Not a few researchers have already discussed Saichō’s use of the term “enki”, especially in interpretations of “enkijūku”. But it seems to us that they are only rhetorical wordings, when we compare the famous passage “enkijūku, engyōtsuikō” (圓機已熟、圓教遂興) which began this argument with the wordings and points of Zengi’s gratitude for the lecture on Tendai